

## 本学のGPAの主な内容

GPAは、学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したもので、年度ごとのGPAと入学時から通算の累積GPAの2つのGPAが算出されます。本学が導入するGPAの算出式は下記に示すとおりです。

(1) 試験得点に応じて5段階(4.0、3.0、2.0、1.0、0)の数値(グレード・ポイント)を設定します。なお、受講を途中でやめた科目や不合格となった科目はグレード・ポイントが0点となります。

(2) 各履修科目のグレード・ポイントに、科目の単位数をかけた値を全履修科目分合算し、その値を全履修科目の単位数の合計で割ったものがGPAとなります。

### 1 新しい成績評価と GPA

評価区分	評定記号と評価内容	付加するGP
100～90点	S(秀)：特に優れた成績である	4
89～80点	A(優)：優れた成績である	3
79～70点	B(良)：概ね妥当な成績である	2
69～60点	C(可)：合格に必要な最低限度を満たした成績である	1
59～0点	D(不可)：合格には至らない成績である	0
	N：単位認定科目であり、GPA計算対象外	なし

### 2 GPAの対象となる授業科目

以下に該当する科目を除く、全ての授業科目がGPAの対象となります。(以下に該当する科目はGP(Grade Point)が付加されません。)

- (1) 合格か不合格かだけを判定する授業科目
- (2) 編入学または転入学した際の単位認定科目
- (3) 本学入学前に修得した単位認定科目
- (4) 他大学との単位互換等で修得した科目
- (6) 高大連携の単位認定

### 3 GPAの算出式

$$4.0 \times S \text{ の修得単位数} + 3.0 \times A \text{ の修得単位数} + 2.0 \times B \text{ の修得単位数} + 1.0 \times C \text{ の修得単位数}$$

---

総履修登録単位数(「D(不可)」の単位数を含む。)

(注1) GPAの計算は、小数点第2位以下を四捨五入するものとします。

(注2) 「総履修登録単位数」には、不合格科目を再履修し、合格の評価を得た場合及び再履修の結果再び不合格の評価であった場合の、それぞれ再履修前の不合格評価については、通算のGPAには算入しません。ただし、年度ごとに算出するGPAにはそれぞれ算入します。

(参考) ある学生のGPA

授業科目名	単位	得点	評価	グレード・ポイント	グレード・ポイント× 科目の単位数
哲学	2	92	S (秀)	4.0	4.0× 2 = 8.0
政治学	2	75	B (良)	2.0	2.0× 2 = 4.0
自然科学入門	2	35	D (不可)	0.0	0.0× 2 = 0.0
倫理学	2	70	B (良)	2.0	2.0× 2 = 4.0
健康とスポーツの科学	1	受験不可	D (不可)	0.0	0.0× 1 = 0.0
英語A	2	80	A (優)	3.0	3.0× 2 = 6.0
介護実習Ⅱ	4	90	S (秀)	4.0	4.0× 4 = 16.0
経済学	2	64	C (可)	1.0	1.0× 2 = 2.0
心理学	2	84	A (優)	3.0	3.0× 2 = 6.0
法学	2	100	S (秀)	4.0	4.0× 2 = 8.0
情報処理入門	2	95	S (秀)	4.0	4.0× 2 = 8.0
合計	23				62.0 ポイント

GPA = 2.7 (62.0 ÷ 23 = 2.69...小数点第2位を四捨五入する)

「GPA制度」の導入について ～新しい成績評価制度の導入についてのQ&A～

Q1. 「成績評価制度」を見直すことになった理由は？

A1. 本学では、学生個々の責任ある履修と積極的な授業参加を促す必要があるとの認識のもと、成績評価基準の見直しについて慎重に検討してきました。

その結果、1. 全学的に統一した基準として用い、2. 公平性、透明性に優れた基準であり、しかも、3. 国際的に通用する基準であるGPA (Grade Point Average) 制度を導入することとし、また、GPA制度では一般的な5段階評価を採用することとしました。

本学で導入するGPA制度は、欧米の大学で採用している成績評価制度に概ね準拠しており、海外留学、海外の大学院進学、企業への就職などの際に、学力を証明する指標として、海外でも通用する成績評価制度となっています。

学生の皆さんには、主体的な学修をより一層促進するための指標としてGPA制度を活用することを期待しています。また、個々の主体的な学修の成果が、GPAという客観的な数値を通して、本学の教育の質、あるいは本学の卒業生の質に対する社会的評価につながっていくものと確信しています。

Q2. 「成績評価制度」見直しのポイントは？

A2. 主なポイントとして、以下の2点を挙げることができます。

1. 合格・不合格の評価を、4段階 (A、B、C、D) から5段階 (S、A、B、C、D) に改め、全学部同一の成績評価方法に統一します。
2. 2014年度に在学する学生全員を対象に、GPA制度を導入します。現行の評点平均値の算出に当たっては「D (不合格)」は対象としていませんでしたが、GPA制度では、「D (不合格)」となった科目も算出の対象となります。

Q3. 実施時期はいつからですか？ また、GPA制度の対象となる学生は？

A3. 2014年4月から実施します。GPA制度の対象は、在学年次にかかわらず、2014年4月に在学する学生全員です。したがって、2014年度前期科目の成績から新しい成績評価制度で評価され、成績通知表、成績証明書に記載されます。

ただし、2014年3月までの成績評価は、これまでの制度にしたがって記載されます。(単位履修証明書もこれまでの成績基準にしたがって記載されます。)

Q 4. なぜ在学生も新しい評価制度が適用されるのですか？

A 4. 「カリキュラム」や「卒業要件」を変更する場合には、改正前と改正後の入学の学生を別扱いにすることが必要ですし、そのような対応を従来から行ってきました。

しかしながら、成績評価の場合には、同一クラスに出席し、同一の授業、試験を受けるにもかかわらず、入学年度で異なる基準を適用し、成績をつけることは、混乱を招くばかりか、公平性や透明性、アカウントビリティ(説明責任)の面からも問題があります。

このため、入学年度にかかわらず、2014年度に在学する全学生を対象に実施することとしました。

Q 5. 就職活動や大学院進学に影響はありますか？

A 5. 企業では、在学中の成績よりも、面接や採用試験の結果を重視する傾向が強いのが実情ですので、GPA制度の導入で、この状況がすぐに大きく変わることはないものと思います。

しかしながら、現在「大学教育の質的水準の確保」を大学は求められており、学修の成果である「成績」を重要視する傾向が社会的に強まってきました。現状でも、GPA制度を理解している企業への就職や、GPAを求められることが多い海外の大学院への進学、海外留学の際などに、成績を見る際の指標としてGPAが活用されている場合が多いものと思います。

そこで、学生の皆さんにとっては、在学中に学んだ成果(学修の到達度)であり、大学にとっては教育目標(到達目標)に対する学生個々の到達度を表す「成績」を今以上に信頼されるものにするためには、成績評価に対する姿勢を明確にすることが何より重要なことであるとの認識のもと、GPA制度を導入しました。

これにより、成績証明書に不合格科目を含め在学中の学修結果をすべて記載することで、学生諸君の学修成果に対する透明性が確保されるものと思いますし、本学の成績に対する企業からの信頼性が高まり、学生諸君の成績に対する説得力も高まるものと期待しています。

また、大学にとっては学生個々のGPAを通じて、本学の教育の質的水準や成績評価の適切性などが社会から評価されることとなりますので、学生の質の確保に努めるとともに、「適正な成績評価を実施している大学」として社会的評価を高めることができるよう大学改革に努めます。

Q 6. どの科目が対象となるのですか。

A 6. 以下に該当する科目を除く、全ての授業科目がGPAの対象となります。(以下に該当する科目はGP(Grade Point)が付加されません。)

1. 合格か不合格だけを判定する授業科目
2. 編入学または転入学した際の単位認定科目
3. 本学入学前に修得した単位認定科目
4. 他大学との単位互換等で修得した科目
5. 高大連携の単位認定

Q 7. GPAはどのように利用されるのですか？

A 7. GPAは、いわゆる高等学校の評定平均値のように、学業成績を総合的に判断する指標として利用されます。学内では、履修指導、奨学金給付・貸与者の決定の際の基礎資料として利用される予定です。

また海外の大学院では、書類選考の重要なデータとして取り扱っているところが少なくありません。

GPA制度は、文部科学省においても成績評価制度のモデルとして例示していますので、今後導入する大学が増えるものと思われます。また、外資系企業に留まらず、グローバル化する日本の企業においても学業成績を判断する指標として参照するところが増えてくるものと思われます。